



THE LONG INTERVIEW

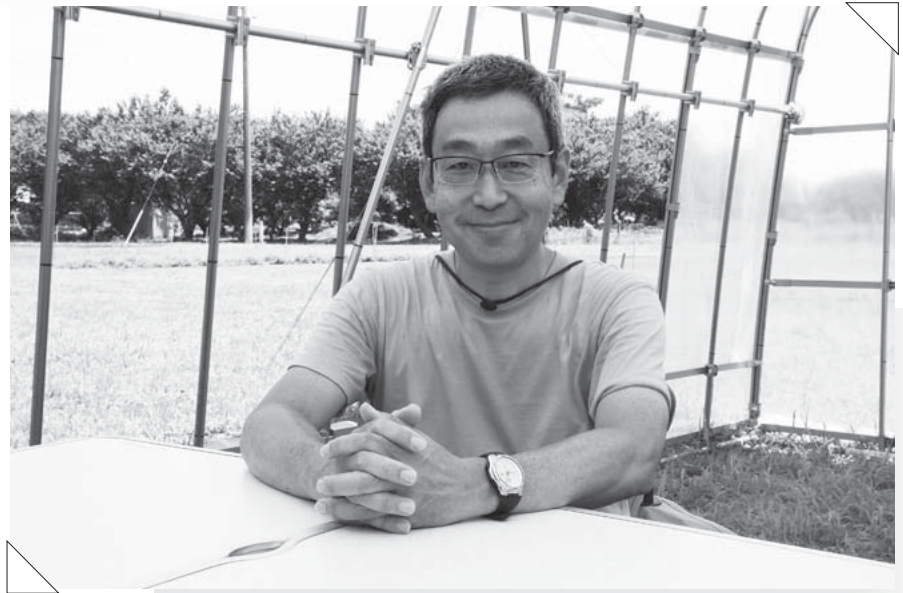
— この人と1時間 —

インタビュアー（構成・写真）

関本 茂

コラボワークス 代表
複業家

中村 龍太さん



なかむら・りゅうた

1964年、広島県生まれ。日本大学卒業後、日本電気入社。1997年、マイクロソフトに転職し、サブスクリプションサービス『Office365』などいくつかの新規事業の立ち上げに従事。2013年、サイボウズとダンクソフトに同時に転職し、複業を開始。2015年にはNKアグリ提携社員として就農し、IoTでリコピン人参『こいくない』を栽培。現在では、サイボウズ、自営農業、コラボワークスのポートフォリオワーカーとなった。2016年、『働き方改革に関する総理と現場との意見交換会』で副業の実態を説明。最近では、プロフェッショナル&パラレルキャリア・フリーランス協会のパラレルキャリア推進プロジェクトにも参画している。趣味は仲間たちとのパエリアづくり。農業×ITの複業で生まれたイノベーションや、複業家としての考えを伝える講演も多数こなす。著書に『多様な自分を生きる働き方 COLLABOWORKS』（エッセンシャル出版社）がある。

人に感謝されることがあれば
それは立派な複業です



複業家の肩書を持つ中村龍太さん（56歳）。毎週月曜日は、農業とテクノロジーを融合したアグリテックの業務を自宅前の畑で行い、残りの4日間を、ソフトウェア開発会社『サ



『サイボウズ』で働くというワークスタイルをすでに7年間、続けている。さらにもう一つ、信頼・好き・生態系という3つのキーワードを軸に、ドローン撮影や複業のレクチャーなどを行う個人会社『コラボワークス』代表という顔も持っている。人は龍太さんのことを「ポートフォリオワーカー」と呼ぶが、ご本人は、「複業は特別なことではなく、むしろ多様な自分を生きるための働き方になる」と笑って50代半ばの人生を謳歌している。図らずも「ウィズコロナ」なる時代に突入し、1人ひとりの働き方の見直しが始まったといっても過言ではないなか、唯一無二の「複業家」の言葉に耳を傾けてみるのも面白い。

必要に迫られて始めた複業は ポートフォリオワーカーへ深化

龍太さんの「複業」は、2013年10月よりスタートした。

「外資系のマイクロソフトを退職し、一部上場のサイボウズと、マイクロソフトのビジネスパートナーであった中小のダンクソフトに同時に入社しました。いろいろな人から複業の理由を聞かれますが、当時、子供が2人とも大学生で教育費がかかったからです。それ以外に何もありません。なので、戦略的に動いたというわけではなくて、成り行きで複業に至ったというのが本当のところですよ」

読者はとっくに気がついていると思うが、龍太さんの「複業」は「副業」ではない。念のため記せば、副業は副次的な収入を得るための仕事であり、複業は、どの仕事も正業で

すべて並列という考え方に基づいている。

「僕は本の中で、3社で複業するポートフォリオワーカーとか言ってますけど、実態はそんなにかっこいいものではありません。サイボウズとの面接のなかで、“そんなにお金を出せないけれども、複業という手段はあるのではないか”という話になり、逆に『そうなんだ?』って思ってチャレンジしたのです。これが僕の“複業”の始まりだったのです。ちなみに、サイボウズでは『働き方改革』が提唱される前の2012年から複業を解禁していました」

今でこそ「複業家」を名乗る龍太さんだが、龍太さんが複業を始めた当時、一部上場企業の正社員の中で、いわゆる副業・兼業をしているケースは極めて稀だった。

「だからといってパイオニアなんて言ってもらうほど大したことではありませんが、自分の中では、そう言われればそうかもしれないなどと納得しています。ちなみに“複業家”は自分で名乗ったものでなく、人が付けてくれたものですが、とても良い感じなので肩書として遠慮なく使わせていただいております(笑)」

感謝という対価を貰いながら 複業に励むという生き方

一連の新型コロナウイルス感染拡大の状況下、龍太さんに初めてコンタクトを取ったのは3月だったが、直接会って話ができしたのは5月末のことだった。



THE LONG INTERVIEW

「僕はどちらかというと朝型人間で、毎朝5時には起き、6時には家を出て週4日、サイボウズに出社しています。7時30分からはもう仕事しているみたいな感じの日々を送っていたのですが、コロナの影響で2月の終わり頃からは、トータルで2回ほどしか出社していません」

コロナ禍のなかで、多くの人がそうであったように、龍太さんもまた自らの生き方、暮らし方、働き方に新たな発見があったようだ。

「出社しなくなると、当然ながら5時に起きる必要がなくなるので、ちょっとゆっくり6時くらいに起きて、7時には朝食を摂るなんて生活が新たに始まりました。そうすると心身ともに余裕が生まれますから、出勤のため、いかに自分が体力を使っていたのかと、改めて思ったりしましたね。逆に体力を使う時間がない分、今度は朝30分、自宅前に広がる畑の草刈りをすることが朝のルーティーンになりました。ちなみに、僕の職場は社長室ですが、オンラインで朝礼というちょっとしたミーティングをした後、9時からのテレワークに入るという就業形態になっています」

龍太さんとの会話の中から出てきたキーワードが「就農」だ。マイクロソフト勤務時代から趣味で農業をやっており、自宅前の畑は社内の農業クラブの活動拠点にもなっていた。サイボウズに転職後も、農業を普通に続けている。

「僕は、和歌山県にある『NKアグリ』とい

う会社の社員として、2015年から『こいくれない』というリコピン人参を生産していました。サイボウズのクラウドサービス(kintone)を使うことで収穫予測ができ、出荷先にいち早く納入時期と納入量を連絡できるメリットがあるんです」

こいくれないの種まきは例年8月から。近隣の農家から借りている土地ということもあり、龍太さんは「感謝」の気持ちを込めて毎朝、草刈りに精を出しているというわけだ。

「僕が位置づけている感謝というのは、実は報酬なんです。感謝という報酬を貰いながら、複業の1つであるこいくれないの生産に携わっているのです。僕は今、複業家としての考えを伝える講演なんかもやっていますが、ある時、参加者の1人から、こう質問されました。『私はボランティア活動に参加していますが、お金を貰っていません。これって複業ですか?』と。僕は、『ボランティア活動を通して感謝という対価を貰っているのだから、それは立派な複業です』と答えました。彼は、『ボランティア活動が腑に落ちた』と言って笑顔を見せてくれました」

「分人」として臨む複業は 人の自然な在り方に通じる

自身が思い描く「複業」について、「別に特別なものではない」と語る龍太さん。コロナ禍の影響がなければ、週に4日はサイボウズで勤務。月曜日は自営農業として畑に出で、土・日については「完全に自由な時間」と言って笑った。



「2013年から複業を始めてから、振り返ってみればあつという間の7年間でした。戸惑いはなかったのかとよく聞かれますが、必要に迫られて複業を始めた身としては、むしろ自然なことだったと捉えています」

だけれども…と、龍太さんが話を続ける。

「これまでの7年間について、自分から何か意味付けをするとすれば、わりと『分人主義』というキーワードがしっくりくるんです」

ここで言う『分人』とは、龍太さんが好きな作家・平野啓一郎氏が示した概念のことである。その趣旨は、1人の人間は「分けられない」(=individual)な存在ではなく、複数に「分けられる」(=dividual)な存在であるということらしい。

「例えば、今インタビューに答えている僕がいて、父母と話をする僕がいる一方で、家では子供たちと話をする僕がいて、サイボウズで働く僕もいる…みたいな感じで、それぞれのシチュエーションで振舞いを変えている僕の分人がいるということですね。そもそも人間は、自分の関心事とか、自分がそこにいることができる安心感みたいなもので、行動を変えているのです。それは“演じている”というよりも、元々人間に備わっている自然の在り様なのではないかと考えると、複業家としての7年間の日々は、それなりに充実していたと思うのです」

逆に、複業と相対する単一的な行動や仕事



人参「京くれない」の畑で。
8月の種蒔きを前に草取りの毎日が続いているようだ

について、龍太さんは、「むしろ不自然なのかもしれない」との思いを巡らしている。

「先ほど、僕の仕事は単にお金を貰うだけじゃないという話をさせてもらいましたが、自分が人に対して教えられる知識や経験、つまり、価値を持っているということを自分が認識すれば、もうそれは複業なのです。これは職場でもいえます。例えば、家族の介護を通して自分が経験したことを同僚たちに教えるとかです。『これをやったらもっと介護が楽になるよ』というようなことを発信できるようになれば、それは立派な複業として認められるべきと思うのです」

複業の付加価値とは何か？

「ズバリ、人に教えられることですね。そういうものが自分自身の中に明確にあれば、複業という生き方を実践できると僕は思っています」

龍太さんのような「複業家」が職場にどんどん増えていけば、働き方はもっと多様化すると記者は思う。

「介護でも育児でも、女性の場合なら出産



THE LONG INTERVIEW

でも、ただ自分が経験しただけにとどまらず、何かちょっと工夫して、『こんなこともあるよ』って伝えるだけでいいのです。最初は1人でもいいんです。1人でもいいから始めることが肝心なのではないでしょうか」

家庭で新たな役割をつくれれば 皿洗いも自分の複業になる

人事の側面から見た場合、はたして「複業家」はどのようなキーマンになるのだろうか？

「人事部はある意味、会社の風土を創る非常に大切な部署でもあります。なので、複業をする人たちの役割はものすごくあると思っています。そこには経験の価値や上下関係など一切無用で、できれば善し悪しもなく…という感じで職場に複業家が増えていくと、とても良いのではないのでしょうか」

ちなみに、サイボウズ内で龍太さんの存在感とは？

「さあどうでしょうか（笑）。僕自身があまりそこを意識していないこともありますけれども、少なくとも僕が複業を始めてから、もう1つの正業として複業を始める同僚が増えてきていることは事実です。そういう意味で言わせていただきますと、共感しているかどうかは別にして、影響を及ぼしているのは多分、ゼロではないと思っています」

「今までは副業の概念として、本業の仕事と副業の仕事に分けて考えていたものが、例

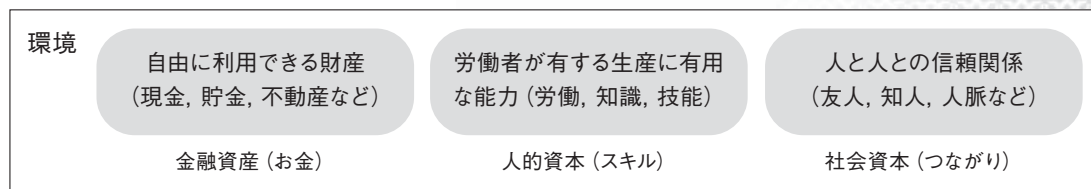
えば、今回のコロナ騒動に絡めて言うと、その境目が何となくあやふやになってきたとは思っています。例えば、緊急事態宣言が発令された途端に、ビジネスパーソンたちの家庭にいる時間が長くなりました。いわゆるテレワークです。そのなかで生まれた家族の反応の1つが、『お父さん（お母さん）がいて助かった』であり、もう1つが、『お父さん（お母さん）がいると困る』というものです。別にお父さん（お母さん）に限ったことではないのですが、会社に行くことで今までちゃんとハマっていたピースが、在宅勤務ではまらなくなった時に、人によっては新たな考えを起こすきっかけになるのではないかという話です。そのような家庭環境の中から、複業というものが、ピースを新たにはめ直すための1つの手段になる可能性が大きいとは思っています」

さらに、龍太さんの話が続く。

「家庭の中で役割が変化すれば、他のところで新たな役割をつくるみたいな、そういうことが複業につながることもありますからね。ちなみに、僕の場合は皿洗いが得意というか楽しい仕事で、僕にとっては皿洗いも複業の選択肢の1つだったりするわけです。なので、凶らずもコロナ禍のなかで生まれた多様な生き方をもう1回見直して、それを、自分を取り巻く周囲の環境とすり合わせてみるという、そういう貴重な時間になっているのが今なんじゃないですかね」

これまでに経験したことがないコロナ禍を、災難として捉えるか、逆に何かが変わる

図：安心・貢献・幸福に必要な資本・資産



3つの資本・資産で考える複業とは？

「私が複業に求めているものは、安心感・貢献感・幸福感の3つです。たまたま本を出す機会をいただいたのでまとめたのですが、要は、金融資産(自由に利用できる財産=現金・貯金・不動産など)、人的資本(労働者が有する生産に有用な能力=労働・知識・技能)、社会資本(人と人との信頼関係=友人・知人・人脈など)の3つが備わって初めて、幸せな複業になるという考え方です。

といっても、いったい何から始めたらいいのかわかりませんよね。私は、お金を貯めることは簡単ではありませんが、人的資本と社会資本を使った複業なら簡単に始められると本に記しました。例えば、先ほどお話しした“皿洗い”の話も、家庭におけるシンプルな労働力の提供に他なりません。お父さんが皿洗いをしたことで家族から感謝されるのであれば、家族における社会資本が大きくなったことを意味しています。一方、人的資本はどうでしょうか。身近な例でいえば家庭からの“ゴミ出し”です。正しく、簡単に、しかもきれいにできるゴミ出しのノウハウを身につけた人は、近所の人たちにその極意を教えることができる知識人であり、地域にとっての人的資本になるのです」



異業種の人材たちも関心を寄せる建設中のビニールハウスのオフィス。「いつ完成するんですかね」と笑った

良いきっかけとして捉えるか…。ビジネスパーソンは今、問われている。

で会社に行っていたんだらうって」

龍太さんの問わず語りが面白い。

ビニールハウスのオフィスから 新しい複業が始まる

「そういうふうにいる人は、きっと多いんじゃないですかね。僕自身も、なんで週に4日もサイボウズに行っていたんだらうと考えたりしましたからね。実は僕、マイクロソフト勤務の時代から、そうですね、20年も前からテレワーク、リモートワークをやっていたんですけど、完全なテレワークになっていなかったってことに今回、改めて気づいたんです。そこで振り返って見たんです。何

「なんでだろう…、そうそう、例えば、会社に行っているからこそ仕事をしている実感があるとか。あるいは、周囲から“俺、仕事をしてるでしょ？”って認められたいという欲求も関係しているのかもしれないね(笑)。もっと言ったら、やっぱり人との会話はリアルじゃなきゃダメだという思い込みもあったかもしれません。で、いろいろな理由が僕の頭の中を駆け巡るんですけど、別にそうじゃなくても、いくつかの場面はリモートでもアピールできるといいますか、僕らの場



THE LONG INTERVIEW

合はIT企業なので便利なツールも揃っていますから、発言する機会、発言する場がいくつもあったりするんです、実際に。そういうことを改めて感じて、『なんで会社に行っていたんだらう』って(笑)』

そもそも「出社することが好き」というビジネスパーソンはどうするか…。

「出社してもしなくても、仕事する場所を自由に選べるようになったらいいですよ。実は今、人からお借りしている農地に“ビニールハウスのオフィス”なるものを仲間たちと一緒に作っているところなんです。ここでどんな複業ができるか実験してみようと考えています。実はビニールハウスのオフィスって、あるようでないんです。ネットで探しても、農業関係者に聞いてもないんです。一級建築士の方にも入ってもらっている反面、『農業関係者はお金がないから予算は100万円以内で』って制約をかけながらですけれども(笑)。そんなプロジェクトをFacebookで発信すると共感してくれる人も全国にいて、農業従事者もいれば、IT関係者もいるし、建築家もいるし、自衛隊を辞めて求職中という青年もいます。僕が思い描く複業の世界がどんどん広がって楽しいです」

龍太さんが追い求める複業の形は、いまだ未完成なのだ。

「そもそも“自分の行動を意味付けする”ということは、楽しいことだと思うんです。人間にとって一番本質的なことのような気もしています。これを人事の方々にどう捉えて

もらえるかというような不安もありますが、逆に楽しみのようなものもあってしています。建築中の写真をFacebookに上げると、近郊の農家さんも『どうなの?』って様子を見に来ます。何が生まれるかまだ分かりませんが、誰かの感謝を貰える複業につながられるよう試行錯誤している最中です」

あえて巻き込まれて 複業の道を開く

ところで、戦国時代から近世初期にかけて、戦国大名が城下町を反映させるためにとった政策の1つに『楽市楽座』がある。龍太さんも自著の中で、複業と楽市楽座の関連性について記述している。

「そもそも楽市楽座は、初めから“年間これくらいの売上を上げて…”なんてことを計画していたわけではありません。説法しに坊さんが来たり、道化師が来たりすることで、自然に賑わいが生まれるようになり、だんだんと経済的な環境が整っていくというものでした。これってキャンプファイヤーに似てませんか？ 火を囲んで楽しく語り合っている人たちの中に、ちょっと混ぜてくれませんか？ 別の人が入ってくる感覚ですね。そういう産業というものがこれから、小さくてもたくさん生まれて、それが複業になっていったらいいなと思うんですよね。それが軌道に乗ってオペレーショナルな組織の中でさらに発展して、量産できるようにでもなれば、それはそれでいいですし、それから先はそういうことに長けた人、関心のある人にやってもらえればいいと思っています」



「実はこういうことを考えると、価値を創っていくことが好きな人と、オペレーショナルな組織の中で1つのモノを作っていくことが好きな人に自然と二分されるので、そこは仲良く分担してやれば良いと思っています。製造から販売まで何でもこなしてしまう大企業なんかは特にそう思います。逆にそういった自由度が極端にない小規模の会社では、複業という形を認めながら、その人が本当に関心のある分野でイキイキと活躍することを応援してみてもどうでしょうか。そういう複業に目覚めた人材の持つ巻き込み力に巻き込まれてみるのも、悪くないと思っています」

巻き込まれることがマイナスではなく、むしろ究極のプラスとして受け止めるところから、誰にでもできる複業が形を成していくのかもしれない。

「例えば、クリエイティブな産業の代表的な製品としてスマホがありますが、スティーブ・ジョブズが、『3年後の売上計画はこんな感じで』などとは絶対に言っていないと思うのです。彼の『こういうものが作りたい』との熱い想いがスマホを世に送り出したわけで、しかも、“スティーブ・ジョブズだからね”で終わらせるんじゃなく、『いやいや、皆もやれますよ』みたいな世界観を、自らの複業という手段を使って現実のものにしていくという楽しみがあると思うんです。ビニールハウスのオフィスも同じです。屋根に使っている遮光用のビニールシートはたかだか8,000円の安物ですが、いずれは凶面を公開しながら、新たな複業につながる道を模索していきたいですね」



複業家、ポートフォリオワーカーを体現する

After an Hour

開口一番、「僕は妄想が好きなのです」と言って笑った龍太さん。聞けば、サイボウズでは社長室長として1週間に1度、30分間の「ザツダン」の時間が設けられており、各メンバーの妄想が次の仕事につながるケースもあるという。

「家族の話や社会の話、それに自分の関心事などを入れて、皆でわいわいやっています。『それって面白いじゃん』から生み出される新たな行動みたいなものも、これまでにいくつもありました。社長室のリーダーである僕は、『育苗実験室』という言葉を使い、メンバーが持っている“面白い芽”を見つけては、とりあえず培養してみようみたいなことをやっています。具体的には、僕がやっている農業もありますけど、メンバーからは災害支援や児童虐待問題の芽も出てきています。芽が小さすぎるので、踏みつぶされないように育苗するのも僕の役割です（笑）」

数年後、どの芽が日の目を見るのか全く分からないが、龍太さんは今日も“雑談”という名の肥料をせっせと与え続けている。

「忙しいと小さな芽も見つけられなくなるので、自分の関心事でいつも賑やかにザツダンできる部署であるよう努めています」

もうひとつのこと ➡ HP「記者の部屋」へ

—この人と1時間